

# 神と人との間

## —*Catalina* を中心に—

藤 本 隆 康

### 〔I〕

「人は、生まれ、苦しみ、そして死んだ。」<sup>1)</sup>これは、「伝道の書」や髑髏を前にしたハムレットの言葉などと同じように、人生の空しさを語る W.S. Maugham (1874-1965) の箴言である。ただ、ソロモン王やハムレットの言葉の格調の高さに比べると、Maugham の場合はいささか散文的ではある。彼は本質的には世俗的な作家で、懐疑の淵に立って苦悶の叫びを上げることも、抜き差しならぬ厭世観に捉えられることもなく、凡俗の中にあって、卑小な人間の空しい営みを面白そうに眺めている。Maugham が、万巻の書物と深い人間洞察から得たペルシャ絨毯の哲学も、人生の空しさを逆手に取った快楽主義の肯定であり、人生のひずみの中で欲望の成就にあくせくする人間をそのままに受容するものである。

常識を旗頭に置く Maugham は、極端を排斥する。彼は、不完全こそ正常であると考えてるのである。彼の作中人物たちは、大体において混沌とした現実にとっぷりつつかっており、大空を飛翔することもなければ、汚泥にまみれることもない。人間が「みな、偉大と卑劣、徳と悪徳、高貴と低俗とのごた混ぜ」<sup>2)</sup>であるという認識は、彼の人生哲学の基盤をなすものであり、悪で

---

1) W. S. Maugham, *Of Human Bondage* (Heinemann, 1966), pp. 808-9.

2) W. S. Maugham, *The Summing Up* (Heinemann, 1964), p. 52.

すら善を輝かす不可欠なものとしてその存在を主張するのである。矛盾と虚偽に満ちた現実をそのままに受容することは、リアリズムの作家として当然の姿勢であり、夢や理想に向かって邁進する英雄やまったくの悪党は、「リアリズムでは手に余る人物<sup>3)</sup>」として、Maugham の作品にはほとんど顔を見せない。

Maugham は宗教、哲学、芸術といった人間存在の本質にかかわる問題を、実に身近なものを題材にして、わかりやすく読者に開陳してくれる。人間観察の鋭さや機知に溢れる会話の妙は、並の作家の及ぶところではない。社会や人間に鋭く切り込む彼の諧虐に感心しない読者はいないだろう。しかし、「金は第六感のようなもので、それがなければ他の五感を十分に働かすことはできない<sup>4)</sup>」とか、「労苦は人間を高めるのではなく、墮落させる<sup>5)</sup>」といった言葉に象徴される Maugham の文学の世俗性に、頭では納得しても、心を揺り動かされることはまれである。彼も同時代の多くの作家と同じように、故国を見限って世界の国々を遍歴した。しかし、アフリカやアジアの奥地を舞台にして極限状態に置かれた人間の魂の苦悶を描く J. Conrad(1857-1924)、インドにあって西洋と東洋との連結を模索する E. M. Forster(1879-1970)、色褪せた神をアフリカという舞台で甦らせようとする G. Greene (1904- ), メキシコやオーストラリアなどで人間の復興を求める D. H. Lawrence (1885-1930)、東南アジアやパリの下層社会に溶け込んで文明の殻を破ろうとする G. Orwell (1903-50) などのような作家の旅が、未知の世界に深くかかわっていく深刻な問題意識を孕んだ、いわば求道の旅であるのに対して、Maugham の場合は、あくまで文明の世界にとどまっており、物見遊山、あるいはジャーナリズム的な観察の域を出ないのである。彼は、イギリスの中産階級的な節度を常に失わず、「精神的な冒険<sup>6)</sup>」によって世俗の安逸を乱そうとはしな

3) *Ibid.*, p. 201.

4) *Ibid.*, p. 112.

5) *Ibid.*, p. 62.

6) W. S. Maugham, 'Preface' to *The Travel Books* (Heinemann, 1955), p. x.

い作家なのである。

このような節度は、自ずと創作活動にも反映するもので、「きまった時間に書き、作品に最高の値がつくように気を配った<sup>7)</sup>」と Maugham が多少の皮肉をこめて書いている A. Trollop (1815-82) と同じように、彼もきちんと区切った創作活動のできる「職業作家」であった。1933年 *Sheppey* を出して劇作の筆を断つと宣言し、60才になると自らの過し方を締めくくる意味で *The Summing Up* を書き、1948年 74才で *Catalina* を書くと、もう小説は書かないと宣言した。実に意志が堅いというか、計算高いというか、同じように「娯楽作家」の烙印は押されても、*Edwin Drood* の途中で作家としてのエネルギーを燃焼しつくしてこの世を去った C. Dickens (1812-70) のような作家とは比ぶべくもない。

さて、*Catalina* は、計算高い Maugham の最後の小説として興味をそえられる作品である。いわゆる Maugham の四大小説と言われ評価の高い *Of Human Bondage* (1915), *The Moon and Sixpence* (1919), *Cakes and Ale* (1930), *The Razor's Edge* (1944) などと比べると *Catalina* はいかにも小粒で、小説というよりは、とりとめのない夢物語のような印象を与える。しかし、この小説には Maugham の人生に対する観照がコンパクトに盛り込まれており、謎の人物と言われた彼の真情が‘romance’という形を借りて吐露されていることも事実である。*Catalina* は、人生の分岐点で *Of Human Bondage* や *The Summing Up* を書いて一区切りつけた Maugham が、自らの人生と文学を総括した作品と言えるだろう。

*Catalina* は、異質なものがなくまぜになった作品で、とりとめのない物語りであるとの印象は拭えないが、こうした構想は初めてのことでなく、1904年に出版された *The Merry-Go-Round* で Maugham はすでに、人生の異なった局面を見えない糸でつないで、より広い視点から人生を統合しようと試みている。その時の心境を彼は *The Summing Up* で次のように述

---

7) *The Summing Up*, p. 78.

べている。

The experience of life I was for ever eagerly seeking suggested to me that the novelist's method of taking two or three people, or even a group, and describing their adventures, spiritual and otherwise, as though no one else existed and nothing else was happening in the world, gave a very partial picture of reality. I was myself living in several sets that had no connection with one another, and it occurred to me that it might give a truer picture of life if one could carry on at the same time the various stories, of equal importance, that were enacted during a certain period in different circles.<sup>8)</sup>

これは、人生を大きな舞台に見立て、それぞれの場面で無関係に営まれているように思われる出来事に、ひとつの原理を与えようとする試みである。ペルシャ絨毯の哲学は、個人主義をつきつめたものであり、人間のあらゆる生き方を肯定するものである。存在そのものを肯定する Maugham の文学には従って、異なった価値が二律背反的に共存する。彼は世俗性を吹聴しながらも、幅広い人生経験から帰納的に、人生を統合するはずの真・善・美を求めてやまない作家であった。世俗の迷路の中で、彼は常に道しるべを探している。冷笑家で、人間の愚かしさを皮肉な目で見つめる Maugham が、折にふれて世俗の垢に染まらない人物を創造しているのもそのためである。そして最後の小説 *Catalina* で、Maugham はやっとひとつの道標に辿りつくのである。

## 〔Ⅱ〕

*Catalina* は、17世紀初頭の厳しい宗教裁判の行なわれたスペインを舞台にした作品である。スペインは Maugham の憧れの国であり、聖トマス病

---

8) *Ibid.*, p. 167.

院附属医学校を卒業してすぐ心踊らせつつ訪れた後も、毎年のように足を向けた国であった。スペインを舞台とする小説は、*Catalina* が最初で最後であるが、旅行好きで世界各地を遍歴した Maugham にとって、この国は特別な意味を持っていた。現実を冷ややかに見つめる Maugham の心の奥に憧れや夢があるとすれば、遠い黄金時代のスペインこそ、それを叶えてくれる場所であり、従来のリアリズムの作品とは趣を異にしてロマンティシズムの香りの色濃く漂う *Catalina* の舞台として、それは格好の国であった。

この作品は歴史という霞がかかっているため、リアリズムの作品に見られる濁りがなく、神と人間が、何らの齟齬もなく共存するおらかな空気が全体に感じられる。Blasco 司教を中心に展開する前半の宗教的雰囲気と、旅役者となった *Catalina* の世俗的な生活が描かれる後半とが一見ちぐはぐな感じを与えはするが、こうした二つの対立する世界を一つの舞台にのせることに、疎遠になった神と人との間に血を通わせようとする Maugham の意図が読み取れるのである。

Maugham にとって神との出会いは、けっして暖かい感情を呼び起こすものではなかった。*Of Human Bondage* で切実感をもって描かれているように、牧師である叔父の低劣な信仰生活を目のあたりにして、彼は宗教に対して拭い難い不信感を抱くようになる。そして、信仰の絆を痛快に断ち切った後も、彼はおぞましい牧師 Davidson (‘Rain’) のような人物を創造したりして、積年の憂さを晴らすのである。「誠実、高潔、真実という理想をもって<sup>9)</sup>いた」Maugham は、やがて人間というものが高潔だとか卑劣だとかといった形で割り切れるものではなく、「支離滅裂で」<sup>10)</sup>「大体において、善人と悪人との間には道徳家が信じさせようとするほどの違いはない」<sup>11)</sup>と考えるようになる。

内省的な気質であることにもよるが、Maugham は倫理観の欠如した、世

9) *Ibid.*, p. 51.

10) *Ibid.*, p. 55.

11) *Ibid.*, p. 57.

に認されない人物を多少の憧れをこめて描いている。Kitty Fane (*The Painted Veil*), Julia (*Theatre*), それに Maugham がもっとも愛着をこめて描いた Rosie (*Cakes and Ale*) といったこだわりなく愛欲に生きる女や, C. Townsend(*The Painted Veil*), G. Kemp(*Cakes and Ale*), Tom (*Theatre*), R. Flint(*Up at the Villa*)といった女たらし, Cronshaw (*Of Human Bondage*) のような放蕩な芸術家くずれ, さらに Nichols(*The Narrow Corner*) のような罪意識とは無縁のならず者などがそうである。こうした人物たちに共通して言えることは、彼らが、社会的な拘束や窮屈な良心といったものから解放されて、本能的な生き方のできる自由な人間であるということである。終生自由を求めながらも真の意味での自由を知らなかった Maugham は、彼らを創造することによって、一種のカタルシスを経験しているとも言えよう。

しかし、Maugham の作中人物たちは不思議と孤立している。Calder が、「Maugham の中心人物の扱い方でもっとも重要な点は、彼らのほとんどが最後には他者と完全に隔絶されることである<sup>12)</sup>」と述べているように、彼らは自由は得ても、他者との間に厚い壁を築いて孤立してしまうのである。Maugham の小説に暖かさが欠けているのはそのためで、人物たちの間にはほとんどといって真実の人間の結びつきは見られない。しかも、多くの人物たちは、自殺や不幸な死によって実りない人生に淋しく別れを告げるのである。Liza (*Liza of Lambeth*), E.Craddock(*Mrs.Craddock*), George(*The Explorer*), Fanny Price(*Of Human Bondage*), Fred Blake(*The Narrow Corner*), K. Richter(*Up at the Villa*), Sophie (*The Razor's Edge*) など、死に追いやられる人物は枚挙にいとまがない。こうした人物たちにとって、自由は自らの孤立感を募らせるだけなのである。人間の絆には際限がない。やっと勝ち取った自由ですら新たな絆となって人間を苦しめるのである。Maugham はさまざまな人物を通して、人間の絆によって苛まれる不幸を描いてきた。

12) R. L. Calder, *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom* (Heinemann, 1972), p. 256.

時にはそれは不可避免的に人間を襲う運命であったり、社会的因襲であったりする。また時には信仰や不信仰、恋愛や結婚、欲望とか幻想、あるいは身体や性格の欠陥が絆となる。そうした無限の絆が人間を孤立させ、周囲との正常な接触を人間から奪っていくのである。*Of Human Bondage* で Philip が亡き母親に対してしみじみと感じるあのぬくもりは、二度と現れぬ夢のように Maugham の世界から消えていく。しかし、Maugham の世界が暗澹として光明がないかということそうでもない。彼は、淋しく孤立する人間にまじって暖い余韻を残す人物を折にふれて創造している。彼らは *Of Human Bondage* の Athelny 一家のように、平凡だが「善の美しさ」<sup>13)</sup> が自然に輝き出るような人たちで、彼らの優しい心は Philip の孤独をいやしたように、ささやかながらも人間の連帯の可能性を示唆しているのである。彼らは、いわゆる「地の塩」であり、たとえば、*The Moon and Sixpence* の Dirk Stroeve や Ata、また *Of Human Bondage* の Norah のように、自らの犠牲の上に他者を生かす無私の愛を具えている。さらに、こうした善良な人物たちの延長上にいるのが *The Razor's Edge* の Larry (Laurence Darrell) で、彼は、これまでの消極的に善を輝かすだけの人物たちとは違って、悪や世俗とはっきり対立する精神を担っている。Maugham は、この作品で、ヒンズー教の悟りを得た Larry によって、神と人間との融合を模索しており、Larry が誰からも見捨てられて娼婦と堕してしまった Sophie との結婚を考えるくだりには、人間愛を超える愛の存在が浮かび上がってくるのである。*The Razor's Edge* は、一度神と袂を分ち、世俗の世界に凱歌を奏でた Maugham が神に復縁を求めた作品であるとも言えるであろう。そして *The Razor's Edge* から四年後、*Catalina* において、神と人との和解は成立するのである。

### 〔Ⅲ〕

*Catalina* の冒頭は、スペインの町を舞台にしているためでもあろうが、

---

13) *Of Human Bondage*, p. 716.

Maugham の小説では珍らしく明るい雰囲気包まれており、雲一つない青空からさんさんとふりそそぐ日光と、人々のさんざめきが町中に満ちている。この明るさは司教 Blasco の厳しい信仰生活の描写にかなりのスペースが割かれているにも拘らず、作品全体の基調ともなっている。

カステル・ロドリゲスの町は、聖母被昇天の祝日でもあり、この町の出身であるセゴヴィアの司教 Don Blasco de Valero と王軍の隊長 Don Manuel という栄達を極めた兄弟を迎えるために湧き立っている。一方、町の賑いから離れて、ひっそりとしたカルメン会の女子修道院附属の聖堂で、足の萎えた娘がたったひとり聖母マリアの像に祈りを捧げている。Catalina という名のその娘は、聖堂の戸口で松葉杖を石段の下まで落してしまい、それを拾い上げる苦しさ和我が身のみじめさに涙をこぼす。お祭りで人々が生きる悦びに浸っている中で、賑いから切り離された Catalina のこの侘しさは、*Of Human Bondage* の Philip の孤独感につながるものである。Catalina も Philip と同じように足の欠陥によって他の人間から隔離されている。しかし二人の大きな違いは、Catalina の祈りに神が応えてくれることである。彼女は Philip のような苦行はしない。ただ Diego の愛を失った淋しさを訴えるだけである。Philip が冷い無言によって神にはねつけられるのに対し、やるせない涙にくれる Catalina の前には「やさしいまなざし」をした聖母マリアが現れ、彼女は慰められる。神は Philip の場合のように、遠くかけ離れた抽象的な存在ではなく、「田舎の女、おそらく百姓の妻」<sup>14)</sup>ではないかと、Catalina が思うほど身近な存在として現れるのである。

Catalina の前に現れた聖母マリアは、「神にもっともよく仕えた Juan Suarez de Valero の息子があなたをいやしてくれる力をもっています」<sup>15)</sup>と言って姿を消す。Valero には三人の息子がいて、長子は普く尊敬を受けるセゴヴィアの司教 Blasco、二番目の息子 Manuel は軍人で、出世と我欲に捉われた利己主義の権化、末の弟はパン屋を営む善良な男 Martin である。

14) W. S. Maugham, *Catalina* (Heinemann, 1966), p. 7.

15) *Ibid.*, p. 10.



人々は当然のように神の僕たる Blasco 司教が奇跡を起こす人物であると信じて疑わない。しかし、神から「空中浮揚」のしるしを与えられながらも、彼は無残にも失敗する。Blasco は、人格高潔で信仰の模範とされるべき人物であるが、Domingo によって後に指摘されるように、彼の信仰は生きる悦びさえも犠牲にする人間性の否定の上に立ったものである。Maugham は、「常識」や「ユーモアの感覚」<sup>16)</sup>を神の重要な属性と見なし、それらを具えた神が自らの与えるよきものを拒むかたくなな信仰を嘉するはずはなく、むしろ途方もない人の錯誤に苦笑しているはずだ、と考えるのである。

Blasco が否定さるべき神の一面を代弁するとすれば、二番目の息子 Don Manuel は人間の不快な一面を代弁している。彼は傲岸にも奇跡を試みるが無論失敗する。悪をリアリズム的な視点から捉えてきた Maugham は、*The Magician* の Haddo を除くと、純然たる悪は描かなかった。しかし、「へつらい、追従、二枚舌、無節操、打算によって高い尊敬を勝ち得た」<sup>17)</sup>と辛辣に批判される Manuel は、人間の完全なる否定像として描かれている。彼が、我欲を押し通して人間の融和を破壊する軍人であるということも象徴的である。ここで Maugham は、これまでの人物に見られた善と不分離の悪ではなく、善と対立するものとしての悪を明確にしている。

このような救い難い人間悪に対立するものとして描かれるのが Martin である。群衆の中から Blasco に呼び出され、自分でも信じられないような奇跡をやってのける Martin には、これまで創造されてきた一連の善良な人物たちとは一線を画すものがある。偉大な兄たちの栄光とはかけ離れた世界で、家柄には似つかわしくないパン屋を営んでいるため、むしろ蔑まれるような存在の Martin が奇跡を起こすという結末は別に驚くほどのことはない。Domingo ならずとも、読者にはこのパン屋が神にもっともよく仕えた人物であることは初めからわかっている。ただ見逃せないのは、リアリズムの世界にためらい勝ちに善をさしはさんできた Maugham が、この Martin に神

16) *Ibid.*, p. 233.

17) *Ibid.*, p. 249.

の力を付与することによって、臆することなく善の勝利を宣言したことである。

悪のはびこるリアリズムの世界では、善は信仰とか夢といった非現実的な形で存在するに過ぎない。しかし、長い人生の遍歴の後で懐しく Maugham の心に浮かぶのは、ふと出会った善良な人たちであった。栄達の華やかな世界は幻のように消え、「人生の歩みの中で出会った多くの人の中に、考えてみれば幾度となく見出した善良さは、真実性を持っていたのではないか<sup>18)</sup>」と彼は考える。そして、こうした善の普遍性が Martin によって具象化されるのである。小肥で飲食を愛し、人をもてなすことの好きな平凡な庶民である Martin は、「家族を店の上に住ませ、夜明け前にパンを焼き、それから農場に出かけて暗くなるまで働いた<sup>19)</sup>」と紹介されている。Martin の人生は、Maugham が最高の絵模様と考える、「土地を耕し、作物を取り入れ、労働や余暇を楽しむ、愛し、結婚し、子供をつくって死んでいく百姓<sup>20)</sup>」の絵模様と合致するばかりでなく、そこにはさらに深い宗教的意義がこめられている。Martin の愛する農耕は、「創世記」に、「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた<sup>21)</sup>」とあるように、神と人とを根源的に結びつけるものなのである。さらにパンがキリストを暗示していることは言うまでもない。パンは、神が人間に与える現世での喜びの象徴であると同時に、「わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べるものはいつまでも生きるであろう<sup>22)</sup>」というキリストの言葉に示されるように、神の恵みを感謝して素朴に生きる人たちに与えられる永遠の生命を暗示するものである。謙虚で心優しく、人から蔑まれながらも人を愛し、パンを施す Martin は、確かにキリストを想起させる人物なのである。

---

18) *The Summing Up*, p. 304.

19) *Catalina*, p. 32.

20) *The Summing Up*, p. 289.

21) 「創世記」、2:15。

22) 「ヨハネによる福音書」、6:51。

神と人間との結びつきは、Catalina によってさらに明確に示されている。Maugham にとって神の概念は人間的な生き方と対立するものであった。しかし、Catalina では Catalina と Diego との結婚に手をさしのべるほどに、神は人間の幸せに親密にかかわってくるのである。

Catalina が結婚に至る経緯は喜劇的なタッチで描かれている。Catalina は Doña Beatriz の計らいで Diego と旅立つことになるが、町の外に出て最寄りの教会で結婚式をあげるまでは男を許してはいけないと Beatriz に諭される。二人で馬を走らせているうちに何度か Diego は Catalina を誘惑しようとするが、その度にきまって二人のいる場所にだけ雨が降り出して彼を悔しがらせる。ある村に着いた時、馬がてこでも動こうとしない。気がついてみると教会の前である。Catalina は気の進まぬ Diego と牧師を急かたてて結婚式をあげるところまでこぎつける。しかし、聖器係の男の他にもう一人証人が足りず困っていると、一人の婦人が現れて証人となってくれ、二人の結婚がめでたく整う。あとでわかったことだが、その婦人は、台座の上に置かれていた聖母マリアであった。

一見、他愛のない喜劇に思われる結婚であるが、Catalina の愛には Diego の欲情とは次元を異にするものがある。Diego が欲望の成就をどんなに邪魔されても神の意図を信じようとしなのに対し、Catalina は絶えず、神の臨在を感じ取っている。かと言って、彼女が信仰の篤い堅苦しい女であるというわけではない。彼女は、美しく、優しく、健康的であると同時に、Diego の愛を失った時には生きる希望をなくしたほど恋に燃える娘で、Beatriz に男を忘れるよう諭された時も、動物的な欲情をむき出しにして彼女を驚かせる。官能的で本能的な愛に生きるこうした Catalina の一面は、Rosie, Louise (*The Narrow Corner*), Julia の系列につながるものであるが、Catalina の愛には、ただ官能の充足を求める Rosie や Julia には見られなかった要素が加わっているのである。

Catalina が、馬上で落ちないように Diego の身体に腕をまわしている時の彼女の悦びが、次のように表現されている。

And she was enraptured. She could not imagine anything more like heaven than to ride through the night in the open country with her arms clasped round her lover. They had to be, of course, for that was the only way to hold on,<sup>23)</sup> but it was very pleasant.

人間愛の極致とも言えるこの Catalina の喜びは、「天国の喜びにも似た」ものであり、彼女の愛には地上と天国がいかに自然に共存するのである。彼女は、官能的であると同時に、献身して「キリストの花嫁」となるにふさわしい純潔さをも具えているのである。Catalina の愛の真実に心を動かされた Beatriz が、彼女の献身のために用意した指輪を結婚指輪として彼女に与えることに暗示されるように、Catalina の結婚はそのまま永遠的なものとの結びつきでもあるのだ。Sally (*Of Human Bondage*) や Ata といった女性にも見られる心の優しさによって男にやすらぎを与えるだけでなく、彼女は結婚生活のほころびを積極的に繕っていく。Diego の欠点や浮気を何一つ咎めることはせず、彼女は平凡な夫に生き甲斐を見出させ、生きる喜びを与え続けるのである。聖母マリアが恋人を失って他愛なく涙をこぼしている Catalina に優しく声をかけ、悲しみを喜びに変えてやったように、Catalina は夫の Diego のみならず、司教 Blasco、そして数知れぬ人たちの孤独を慰め希望を与えていく。親しみやすく、その優しさで多くの人たちの傷をいやす Catalina は、Martin がキリストの面影を偲ばせたように、彼女の前に二度現れた聖母マリアの姿を彷彿とさせるのである。

#### 〔Ⅳ〕

Maugham の小説は、いわば世俗を通る、真・善・美の探求の旅であった。リアリズム的視点から真実を觀照し、人生の旅の折々にふと出会う善によって

---

23) *Catalina*, p. 192.

道を示されてきた Maugham にとって、薄汚れた現実の絆から人間を解放する美の存在は、常に心ときめかされるものであった。*Of Human Bondage* で得たペルシャ絨毯の哲学は、美的観照による人間存在の肯定であり、卑小な現実に意味もなくうごめく人間もそれなりの美的価値を付与されるのである。

しかし、人生を絵模様としてみる見方は、美を悪の實在する現実からの「隠れ家」<sup>24)</sup>としてみる美的諦観に過ぎない。彼は美の探求をさらに進めて、*The Moon and Sixpence* では、善悪の混沌とした現実を超絶する宇宙あるいは生命の根源と結びつく絶対美を描こうとした。卑小な現実を遙かに超える非人間的な美を創造する Strickland は、善なるものを凌辱してはばからない。しかし Maugham は、美は人間を正しい行為へと促すものでなくてはならぬと考える。Larry がインドの山奥で経験した自然美の極致は、彼を正しい行為へと促す力を与えるが、*Catalina* では Catalina を役者に仕立て、さらに積極的に、人の感動を誘い、善なる行為へと導く美を Maugham は創造しようとしている。Catalina は容姿が美しく、優雅で、歌うような声の持主であり、彼女自身が美を具現していることはもちろんであるが、Diego と結婚した後は女優となって、積極的な美の創造者となるのである。

自ら劇作家でもあり、演劇の世界の表裏に通暁していたこともあって、Maugham は1937年 *Theatre* を書いて芸術の立場から現実の人生に迫ろうとした。そして *Catalina* で、彼はその考えをさらに発展させて、現実を演劇の世界に包含しようとする。

*Theatre* のヒロイン Julia と Catalina とはよく似通っている。二人とも男の表面的な魅力に夢中になって結婚し、やがて夫の凡庸さに気づいていくが、それを咎めることはせず、自らは芸術の世界に没頭する。しかし、Catalina の場合、夫が浮気をするのに対し、Julia は若いつばめをこしらえて、愛欲や嫉妬に煩悶し、それを演技に転化していく。生々しい現実の愛憎が彼女の演技を迫真的なものにしていることは否めない。しかし、それは内面の美し

24) *The Summing Up*, p. 298.

さがそのままにじみ出る Catalina の演技とは次元を異にするものなのである。

現実には抗いようもなく人間を歪める。美しかった Catalina も年を取り六人の子供を生んで体形もくずれてくる。しかし、Julia の演技に人間的な我執が色濃く反映されていたのに比べ、Catalina が舞台に立つと、移り変わる現実には影のように消え、16才の娘の時とまったく変わらない情熱と美が脈うつのである。Maugham は Catalina の最後の部分で、次のように Catalina の創造する美の永遠性を強調している。

... such was her grace, the melody of her lovely voice and the magic of her personality, that before she had been on the stage five minutes you forgot her age and figure and accepted her without question as the passionate girl of sixteen she was representing.<sup>25)</sup>

Theatre ですでに Maugham は、現実の人間は影のような存在であって、俳優の創り出す世界こそ真実の意義がある、と Julia に語らせている<sup>26)</sup> が、Julia によって表現される美が人間の絆によって限定されるのに比べ、Catalina が生み出す美は、絆につながれた人間を、より高次の世界へと解放する力を秘めている。Blasco が Catalina であるとは夢にも知らず、彼女の演技を見て信仰の絆から解放される場面はこの作品のクライマックスをなしており、ここで Maugham は作品の前半では遠い存在でしかなかった二人を近づけ、神と人との出会いを見事に表現している。Blasco は Catalina の名演技によって長い錯誤のはてにやっと真実の神に出会うのである。皮肉なことに Catalina の演じた場面は、マグダラのマリアの役をする彼女が、台本通りでは自分の出る場がないので、のんだくれの伯父 Domingo に頼んで余分に書いてもらったものであった。芸術は道楽者 Domingo の手を離れ、Catalina

25) *Catalina*, p. 253.

26) *Theatre* (Heinemann, 1967), pp. 292-3 参照。

によって新たな宗教的力を付与される。神がその愛によって *Catalina* をいやしたように、今度は彼女が神の僕たる *Blasco* を芸術によっていやすのである。まさに ‘Art can work its miracles.’<sup>27)</sup> であり、人の中に神が宿り、神の中に人が宿る善美合一の世界である。

Maugham は、*Catalina* の中で作中人物として登場させたドン・キホーテに、芸術（演劇）が人間を高めるものであるということを、次のように語らせている。

“They who write plays and they who act them deserve our love and esteem, for they serve the good of the commonwealth. They set before our eyes a lively representation of human life and show us what we ought to be. They ridicule the vices and foibles of the times and give praise where praise is due, to honour, virtue and beauty. The playwrights improve our minds by their wit and wisdom and the actors refine our manners by the grace of their demeanour and the dignity of their carriage.”<sup>28)</sup>

これは、*Of Human Bondage* で得たペルシャ絨毯の哲学からのはっきりとした訣別である。人生には意味などなく、ただ人間は好き勝手に絵模様を織りなしていけばよいという考え方は、結局は快樂主義の空しさを残すことになる。ここで Maugham は、人生に意味を与え、悪のはびこる混沌とした世界を統一するものの存在を示唆している。ドン・キホーテの言う、‘playwrights’ は神であり、‘playwrights’ の意志を表現する ‘actors’ は *Catalina* のように高次の世界へと人を導く精神を具現するものである。

人生が舞台であり、人間が役者であるとする考えは、リアリズムの作家としてすべてのものに存在価値を見出し、また劇作家の目をもって人生の諸相を演出してきた Maugham の脳裡に常に去来していたものに違いない。

27) *Catalina*, p. 237.

28) *Ibid.*, pp. 218-9.

ドン・キホーテは、さらに続け次のように語る。

“And let us not forget, . . . that just such a comedy as we see played on the stage of a theatre is played on the stage of the world. We are all actors in a play. To some it is allotted to play kings or prelates, to others merchant, soldiers or husbandmen, and each should see that he acts the part given to him; but to select it belongs to a greater power.”<sup>29)</sup>

「舞台で扱われるのは真実ではなく真実らしきである」<sup>30)</sup>ならば、世界という広大な舞台で繰り広げられる人生のドラマも、現実でありながら現実ではないのである。「悪はあまねく実在している。苦しみ、病い、愛する者の死、貧困、犯罪、罪、希望の挫折、悪の目録には限りがない」<sup>31)</sup>というのが Maugham の見てきた人生であり、従って彼の作中人物たちは、リアリズムの枠の中で無目的に地上を這いまわってきた。しかし彼は、ドン・キホーテという現実離れた狂人、ロマンティズムの極を行く人物を最後の小説で登場させ、閉ざされていた現実にも夢とロマンを持ち込むのである。意味もなく無闇に存在していた人間は生きる意義を与えられ、王も百姓もすべて人生という広大な舞台で不可欠の役者となるのである。そして、人それぞれの役割は、人知では計り知れない「大いなる力」(a great power)によって決定され、いかにささやかな役割であろうと、神の演出するドラマに貢献することには変わらないのである。

しかし、喜びや悲しみを束の間に舞台上演じると、人はあとかたもなく永遠の時へと消えていく。「世界は人が通り抜けていく場所」<sup>32)</sup>に過ぎないのだ。「現世は夢であって、目がさめると私たちは永遠の生命の中にいるのです。実

29) *Ibid.*, p. 219.

30) *Ibid.*, p. 217.

31) *The Summing Up*, p. 259.

32) *Of Human Bondage*, p. 669.



在するのはそれだけです」<sup>33)</sup>という，現世との離別を前にした **Blasco** の言葉は，そのまま74才の **Maugham** の心境であったと思われる。

---

33) *Catalina*, p. 247.